

オーナーガーデンを紹介します!

～孫と楽しめる庭づくり～



第四団地 白根洋一さん宅

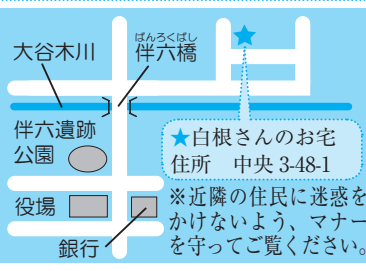
白根さんの庭は、物語に出てくる『秘密の花園』のようだ。建物を含めて約30坪の小さな敷地。だが、300を越すコンテナには、様々な種類の草花が植えられ、見る人の目を飽きさせない。それでいて、花同士が喧嘩をせず、近づいて見ても、全体を見ても調和が取れて美しい。少し視点を変えれば、まったく違う表情が表れ、なかから動物や人形の置き物がひよっこりと顔をだす。訪れた人は、まるで隠れた宝箱を開けた

◎オーナーガーデンに登録する人を募集しています。詳しくは毛呂山町コミュニティ協議会(役場総務課自治振興係) ☎295-2112内線314まで



★オーナーからのメッセージ★

「花が好きな人と話せるのを楽しみにしています。お気軽においでください」



るようなわくわくした気持ちになるだろう。
「孫と楽しむガーデニング」をテーマに作られた白根さんの庭は、ほとんどのものが手作りで、そこかしこに工夫が施されている。たとえば鉢。実は同じサイズで揃えてあり、自由に入れ替えられるため、庭は次つぎと姿を変える。お孫さんがもらってきた朝顔は、庭にあうように、ハンギングにして蔓を庭の天井に伸ばし、花を四方八方に咲かせている。「花は残らない。次つぎと姿を変えていく。だから、仕立て方によって変化があって、想像がふくらんでおもしろい」と白根さんはいう。
白根さんの庭は、お孫さんの成長とともに、これからも変化を続けていく。訪れるたびに、新しい発見がある、ビックリ箱のような庭なのだ。



毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ 187
むしゃこうじさねあつ
武者小路実篤の魅力
～新しき村
90年の原動力～

武者小路実篤は新しき村の創立を提唱し、大正7年(1918)、現在の宮崎県児湯郡木城町の地で実際に新しき村(日向の村)を建設しました。今年(2008)は新しき村開村90周年にあたりますが、開村にあたって実に多くの苦労があったようです。実篤の文学活動を理解する人は村を歓迎する一方で、都会から見知らぬ団体が移り住むことに強い抵抗を感じる人びともいました。当時は社会体制に対し、批判的な考えを持つ団体が誕生している時期でもあり、抵抗感を助長していたのかもしれませんが、しかし、新しき村はそのような団体と一線を画す決定的な主張がありました。それは実篤が「自分たちは近所の人、他村の人とはよき隣人でありたい」と述べているように、村外の人びととの交流を積極的に行ってきた点です。村の創立当時、祭りを開催し、近隣の人びとを呼び、演劇や文学など珍しい都会の文化を

披露して楽しませていたようです。後に毛呂山町葛貫に開いた東の村にあってもその姿勢は変わらず、収穫祭など村の祭りを行い、農業協同組合(当時)と協力をして事業を興すなど、地域に貢献する存在であり続けました。それは実篤の「自分たちだけが良くなったのではない、隣人も良くなっていきたい」という考えによるものでした。
実篤は村の創立者でしたが、一會員であると断言していません。しかし村の指針、向かうべき方向に常に創立者として苦悩していましたが、目的をしっかりとつかまへてその方にじりじりと進むもの 萬歳

この言葉から実篤の不屈の精神ともいえるものが伝わってきます。実篤の言葉は一見平凡なようですが、新しき村の活動を重ね合わせていくと、意味深さが伝わってきます。それは、新しき村を支えた原動力でもあり、人間が人間らしく生きる心得といっても良いかもしれません。

■10月11日(土)から、歴史民俗資料館で特別展「実篤の村を開いた毛呂山」を開催します。ぜひご覧ください。



昭和51年 新しき村全景 (新しき村美術館提供)